

否定呼応文脈における否定前置の統語的分析

古澤 壮太郎

1. 導入

本稿では否定呼応文脈における否定倒置について考察する。Wallage (2012) などが指摘するように、否定呼応文脈では (1) に示されるように、否定倒置が起こる場合と起こらない場合がある。

- (1) a. nan þing he ne answerode
no thing he NEG answered
'he did not give any answer' (Wallage (2012: 13))
- b. Nouthur hwit ne blac ne nemmet he in his ordre
neither white nor black NEG names he in his order
'he does not name in his order either white or black' (Wallage (2012: 12))

ここで注目すべき点は、(1b) のように否定倒置が中英語期の例にのみ見られることである。本稿ではこのような否定呼応文脈における否定倒置の歴史的変化について、コーパス調査に基づいて詳細な変化時期を明らかにし、それに対して統語的観点から説明を与えることを試みる。

2. 先行研究

本節では否定倒置に関する先行研究として、フェイズ理論を用いた分析である Koike (2016, 2017) と素性に基づく分析である Wallage (2012) を概観する。Koike (2016) は否定の作用域の演算に関して (2) の条件を提案し、(3) のような否定倒置文に対して説明を与えている。

- (2) 文否定要素の最も高いコピーと作用域としての TP の主要部である T は、同じ転送領域に存在しなければならない。 (cf. Koike (2016: 63))

- (3) Never has spring come to that country (Koike (2016: 65))

(2) の条件に従うと、(3) の派生は never が末端素性により CP 指定部へ移動し、(2) の条件を満たすために T を占める has が C へ移動すると説明される。

Wallage (2012) は古英語から中英語にかけての否定呼応文脈における否定倒置に対して、解釈可能な否定素性 [iNeg] が指定された否定演算子が CP 指定部に存在する場合、否定倒置構文が派生されるという条件を提案し説明を与えている。Wallage によれば、(1a) から (1b) への変化は、文否定要素 ne の否定素性が [iNeg] から解釈不可能な [uNeg] へと変化し、その他の否定要素の素性が [uNeg] から [iNeg] へと変化した結果として生じたと説明される。

Koike (2016, 2017) の分析と Wallage (2012) の分析はどちらも否定倒置に関する事実の説明を与えているように見受けられるが、これらの分析から得られる予測や不明瞭な点について考察の余地がある。次節ではコーパス調査に基づきこれらの分析の検証を試みる。

3. コーパス調査

Koike (2016, 2017) の分析が正しければ、文否定要素と T を占める要素は常に同一転送領域にあることが予測されるが、(4) に示される例は反例となる。

- (4) thynkest thou not that thou doeste her wronge therein? (Koike (2017: 328))

(4) では動詞が T を経由して C に移動しており、T と文否定要素 not は同一転送領域内に存在しないことになる。PPCEME と PPCMBE2 を用いて、(4) のような用例の生産性を調査した結果は表 1 に示される。

表 1 : 10 万語あたりの「語彙動詞・助動詞 + 代名詞主語 + not」の用例数

E1	E2	E3	L1	L2	L3
11.6	11.1	4.2	7.4	7.0	9.0

表 1 の結果から、T と文否定要素が同一転送領域内に存在しない用例は、少なくとも近代英語期を通じて観察されることがわかる。

Wallage (2012) は否定素性の変化がおおよそ古英語期から中英語期にかけて起こったと主張しているが、厳密な変化時期は不明である。したがって、YCOE と PPCME2 を用いて「否定要素 + 主語 + ne + 動詞」と「否定要素 + ne + 動詞 + 主語」の語順を伴う例を収集した。それぞれの結果は表 2 と表 3 に示される。

表 2 : 10 万語あたりの「否定要素 + 主語 + ne + 動詞」の用例数

O1	O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4
0	2	12.7	6	0.8	0	0.8	0.8

表 3 : 10 万語あたりの「否定要素 + ne + 動詞 + 主語」の用例数

O1	O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4
0	2.7	8	8.7	20.8	0.8	1.7	0

表 2 から、「否定要素 + 主語 + ne + 動詞」の語順は O4 期から M1 期にかけて大幅に減少したことが、表 3 から、同時期に「否定要素 + ne + 動詞 + 主語」の語順が増加したことがわかる。

以上のコーパス調査の結果から、Koike の分析から得られる予測が妥当でないことや、Wallage が主張する素性の変化は後期古英語期から初期中英語期にかけて生じたことが明らかとなった。次節では Wallage の分析に一部修正を加えることにより、否定呼応文脈における否定倒置に説明を与えるを試みる。

4. 分析

否定呼応文脈における否定倒置について、Wallage (2012) の分析と Zeijlstra (2012) の上方一致を組み合わせた新たな分析を提案し統語的説明を与える。Zeijlstra (2012) は (5) に示される上方一致を提案している。

- (5) α は以下の場合、そしてその場合に限り β と一致する :
- α が少なくとも 1 つの解釈不可能素性を持ち、 β が対応する解釈可能素性を持つ。
 - β が α を c 統御する。
 - β が α にとって最も近い目標である。 (cf. Zeijlstra (2012: 514))

本稿では否定要素の内部構造は (6) であると提案する。どちらの構造にも DP が含まれる一方で、(6a) の [iNeg] を持つ構造にのみ、Neg 主要部の投射とその指定部に位置する否定演算子が含まれる。

- (6) a. [iNeg] を持つ否定要素の構造
 $[_{NegP} Op_{[iNeg]} [_{Neg'} [_{Neg}][_{{DP}_{[D a(ny)}}][_{{NP} body}]]]]]$
- b. [uNeg] を持つ否定要素の構造
 $[_{DP} [_{D a(ny)}][_{{NP} body}]]]$

また、[iNeg] を持つ否定演算子はそれだけで倒置を駆動することができず、[iNeg] を含む NegP 全体が否定倒置を駆動すると仮定する。以上の議論に基づき、(1b) の派生と否定要素の前置を伴わない場合の派生はそれぞれ (7a) と (7b) に示される。

- (7) a. $[_{CP} [_{NegP} Op_{[iNeg]} [_{Neg'} Neg [_{DP} nouter whit ne blac]]] [_{C'} [_{C ne nemmet}_{[uNeg]}] [_{TP} [_{DP} he] [_{T'} [_{T t_{ne nemmet}_{[uNeg]}] [_{v^*P} [_{t_{NegP}}] [_{v^*} t_{ne nemmet}_{[uNeg]}] [_{VP} [_{VP} [_{V t_{ne nemmet}_{[uNeg]}] t_{NegP}}] [_{PP} in his ordre}]]]]]]]]]]]]]$
- b. $[_{CP} Op_{[iNeg]} [_{C'} C [_{TP} [_{DP} he] [_{T'} [_{T ne nemmet}_{[uNeg]}] [_{v^*P} t_{Op_{[iNeg]} [_{v^*} t_{ne nemmet}_{[uNeg]}] [_{VP} [_{VP} [_{V t_{ne nemmet}_{[uNeg]}] [_{NegP} t_{Op_{[iNeg]} nouter whit ne blac}}] [_{PP} in his ordre}]]]]]]]]]]]]]]]$

(7a) では [iNeg] を含む NegP 全体が CP 指定部へと移動しているが、[iNeg] を含む NegP のみが否定倒置を駆動するという仮定に従い、V-to-T-to-C 移動が生じる。また、[iNeg] が ne が持つ [uNeg] を c 統御しているため、否定素性間の一致は問題なく行われる。一方、(7b) では NegP は元位置に留まっているが、否定演算子のみが CP 指定部へ移動していると分析される。結果として、[iNeg] が [uNeg] を c 統御している構造となるため、否定素性間の一致が行われる。また、NegP 全体が前置されていないため否定倒置は駆動されない。

参考文献 : Koike, Koji (2016) “A Phase-based Account of Sentence Negation in English: With Special Reference to the Negative Inversion Construction,” *Studies in English Literature* 57, 59-82. / Koike, Koji (2017) “The Development of Negative-initial Constructions in the History of English,” *English Linguistics* 33, 307-339. / Wallage, Philip (2012) “Negative Inversion, Negative Concord and Sentential Negation in the History of English,” *English Language and Linguistics* 16, 3-33. / Zeijlstra, Hedde (2012) “There Is Only One Way to Agree,” *The Linguistic Review* 29, 491-539.

コーパス : Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani (2016) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.